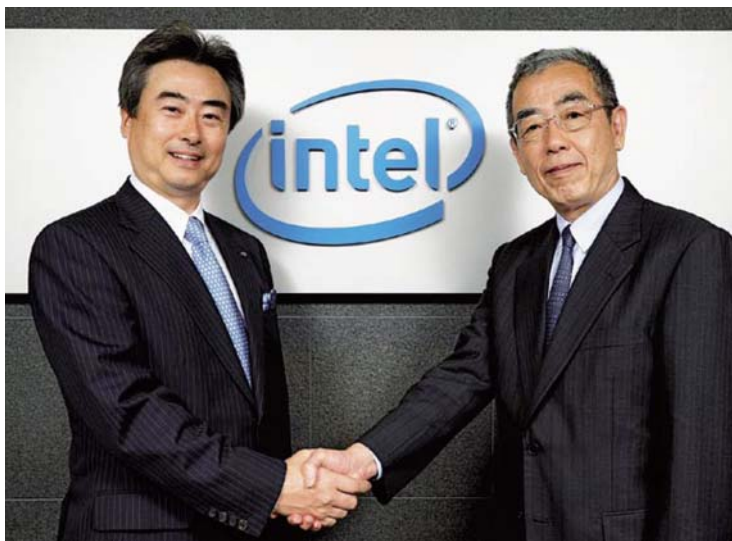


クラウドで変わる企業経営

～厳しい経済環境下における競争力強化の原動力に～



吉田 和正氏

インテル株式会社
代表取締役社長



吉田 透

新日鉄ソリューションズ株式会社
取締役副社長

厳しい経済環境の下、インターネット経由でシステムを利用するクラウド・コンピューティングが大きな話題を呼んでいる。

これからの企業経営にクラウドおよびその技術は、どう影響していくのか。

プロセッサを軸にクラウドを支える各種製品・技術を提供するインテルの吉田和正社長と、

クラウドサービスおよび関連SI事業を展開する新日鉄ソリューションズの吉田透副社長が語り合った。

二人の対話により、クラウドおよびその技術が飛躍の時期を迎え、

今後は企業の競争力を大きく強化する原動力になることが浮かび上がる。(文中敬称略)

最先端の技術はインターネットを軸に展開 クラウドの分野で急速な進化が起きている

——NSSOL吉田 この4月に発表されたインテルXeonプロセッサ5500番台を、当社は開発段階からお借りして各種検証を実施してきました。われわれはSI事業者であり、サーバーを開発するつもりはありませんが、最先端の技術を見極めるため、このようなご協力が不可欠だと考えています。一方で、御社もクラウド・コンピューティングに取り組んでいると聞きます。その背景はどのようなものでしょうか？

——インテル吉田 われわれはプロセッサなどの半導体部品メーカーですが、コンピュータメーカーの方々と共にサーバーなどを開発し、さらにはSI事業者の力をお借りしてサービスやアプリケーションを提供することで、初めて本当に高い付加価値が生まれると考えています。

現在、最も先端的な技術はインターネットを軸に展開されており、多くの企業向けおよび一般消費者向けのサービスやアプリケーションはネット上に構築されています。その動きはこれからも確実に拡大するでしょう。

当社は、そうしたクラウドの分野で起きている急速な進化に対応するため、様々なレベルのプレイヤーとコミュニケーションをとり、新しい技術を短期間で展開したいと考えています。インテルは毎年のようにイノベーションを起こしている会社です。その高い技術力によってクラウドの進化を加速し、一層高い付加価値の提供に貢献していきたいと考えています。

——NSSOL吉田 SI事業者であるわれわれがプロセッサの検証に取り組んだ背景の一つも、クラウドの急速な進展です。当社は、ユーティリティコンピューティングという言葉でITのサービス化が進んだ2005年に「グリッド・ユーティリティ検証セ



吉田 和正氏

米コロラド西州立大学社会学部卒業後、1984年米インテル コーポレーションに入社。1988年インテル株式会社プロダクト・マーケティング部長兼地域営業部長などを経て、2003年6月にインテル株式会社代表取締役社長(2003年6月～2008年9月末まで代表取締役共同社長)。

ンター(NSGUC)」という研究組織を設立しました。当時から目指していたのは、大きなコンピュータを使うのではなく、業界標準のIA(インテルアーキテクチャ) サーバーを複数台利用して、統合したプラットフォームを構築することです。

こうした新しい形態のシステム基盤をユーザー企業へサービスとして提供すると、TCO(総所有コスト)を劇的に削減できます。さらには、コスト削減で生まれた資金を新規投資に振り向けていただくことで、お客様の経営革新を効果的に支援したいと思っています。

多くの企業が共通して抱える課題を解決 スムーズに最新技術の恩恵を受けられる

——インテル吉田 ご指摘のようにクラウドには、TCO削減のように、多くの企業が共通して抱える課題を解決する力があります。当社は、比較的新しい課題についても、クラウドが有効な解決方法を提供すると見えています。

例えば、最近インターネット経由で素早くサービスを提供するビジネスモデルが中心になり、ニーズへの対応力強化が課題になっています。企業のIT部門が求めているのは、なるべく負担がかからず、短時間で検証ができて使いやすいプラットフォームやミドルウェア、および開発環境でしょう。当社はその要望に

直接は対応できませんが、サーバーの性能を高めるとともに、プラットフォームおよびミドルウェアの各階層で標準インタフェースを普及させることを通して、柔軟性や拡張性の高い統合技術を提供していきます。

サーバー増加に伴って消費電力が増大したという課題も最近多くなりました。性能と電力効率の向上を両立させる技術を搭載した製品を投入することで、CO₂の排出削減を含むグリーンITを実現することも当社のミッションです。

いずれの技術も、クラウドによって大規模に利用すれば、メリットをまとめて引き出せます。また、企業はネットワークをクラウドへ接続するだけで、非常にスムーズに最新技術の恩恵を受けられます。

——NSSOL吉田 当社の役割の一つは、まさにその効果を企業システムレベルで具体的に示すことにより、ユーザーの方々に安心してご活用いただける提案をすることです。われわれのシステム研究開発センターは、インテルXeonプロセッサ5500番台を搭載したサーバーを使って、実際のシステムを想定した検証を行いました。その結果、5年前のプロセッサを採用したサーバーと比較すると、例えば仮想的に複数のサーバーを統合するミドルウェアを導入したデータベースシステムの性能が最大で12倍に増え、同じ性能を出すための消費電力については8分の1に減ることが判明しています。

よく言われるように、ネットワーク経由でコンピュータを利用するというクラウドの考え方は新しいものではありませんが、技術の進歩でこれまで思い描いていた理想を実現する環境が整ったのは確かです。

——インテル吉田 われわれも、この20年ぐらいのうちの最近5年間における技術の進化は、これまでになく著しいと感じています。例えば、1993年に登場したPentiumプロセッサには約300万の素子が入っていましたが、2009年のインテルXeonプロセッサ5500番台には250倍になる7億以上の素子が詰まっています。それだけ多くの機能が入りながら、性能が高く消費電力が低い部品を使ったプラットフォームや機器がこれから増えることで、クラウドの進化はさらに急速に進むはずですよ。

——NSSOL吉田 経営の視点からも、クラウドは今後急速に普及すると思います。厳しい経済環境の下、多くの企業はコスト削減に取り組んでいますが、クラウドの活用によって効果的に対応できます。

まず、クラウドには毎月いくらという料金体系で情報システムを導入できるというメリットがあり、ITの初期投資コストを大幅に抑制できます。また、クラウドではシステムコストが固定費になりません。システムの使用量に応じた利用料金を負担すれば済みますし、急激な負荷の増大に対してもリソースを柔軟に増やすことが可能です。

クラウドでは規模の経済も働きます。これまでもそのようなことは言われていましたが、より劇的です。既に数十万台のサーバーが稼働するデータセンターも登場しており、これまでと違う大きさのイノベーションが生まれる可能性が高まっています。

——インテル吉田 クラウドの普及によって、これまで想像できなかったような数のアプリケーションがネット上で稼働するでしょう。大量の複雑なデータを瞬時に可視化して送受信可能になり、ネットを利用しない商品が考えられなくなる時代が来るかもしれません。しかも、これからの技術の進歩を考えると、今はまだクラウドの黎明期です。

経済環境が厳しいときこそクラウドは効果的 グローバルな競争力を維持するためには不可欠

——NSSOL吉田 おっしゃるように、今後はITの活用シーンが質的に変化する可能性があり、これからどうクラウドに移行していくかが、企業経営上の大きな課題になります。まずは既存の自社所有のシステムを、仮想化技術などを採用した変化に強い環境に移行する。それから、個々のシステムに優先度を付けてクラウド環境へ移すのが現実的です。「自社システムの固有部分」「特定のユーザーのみが利用するプライベートなクラウド」「不特定のユーザーが使うパブリックなクラウド」をそれぞれどう使い分けていくかを判断することになります。

——インテル吉田 クラウドへの移行に際しては、大きな企業ほど戦略的に検討する必要があります。クラウドサービスは電子メールのように部分的なシステムが主流です。部分的とはいえ、意識して取り入れないと、従来の自社所有システムの枠組みから抜け出せません。一方で、小さな会社は、必要なシステムのはほぼすべてをクラウドサービスとして導入できます。そうした会社は、これから起きるクラウドの急激な進化とともに、事業を成長させていけます。

このように、クラウドは今後、企業競争力を左右する大きな要因になる可能性もあります。短期間で資産価値が目減りする時

代でもあり、リスク管理という観点からもシステムを所有しないクラウドへの移行が不可欠です。

——NSSOL吉田 実際にクラウド上にシステムを構築し、システムをいっさい所有しないベンチャー企業も登場しています。確かに、日本企業が置かれている経済環境はこれまでにない厳しいものですが、クラウドによって大幅なコスト削減ができる、あるいは新しいビジネスの芽が生まれているといった事実があります。日本企業が今後もグローバルな競争力を高く持ち続けるには、クラウドは経営にとって非常に重要な仕組みでしょう。

また、少子高齢化が進むなか、ITの開発力を高めるためにもクラウドが不可欠です。今後もITの活用シーンはますます増えていくと思いますが、運用の効率化を通して運用保守から開発へと人員配置の比重を移せます。

——インテル吉田 経営者はクラウドの進展を見ながら、会社がどのような方向へ進み、どのようなアクションをとるべきなのか判断する必要があるでしょう。当社も引き続きイノベーションを進めるとともに、クラウドの進化を加速する新しいエコシステムを作っていきます。

——NSSOL吉田 どうもありがとうございました。今後も多彩なご支援・ご協力をいただければ幸いです。



吉田 透

1972年東京大学工学部電気工学科卒業後、新日本製鐵株式会社に入社。1994年エレクトロニクス・情報通信事業部ITセンター所長などを経て、2001年新日鉄ソリューションズ株式会社取締役産業ソリューション事業部長。2007年4月から取締役副社長（技術本部長委嘱）。